

酒井啓子（千葉大学 グローバル関係融合研究センター長・領域代表）

報告題 “Searching for Relational Studies on Global Crises in order to Establish a New Paradigm of Social/Human Science for Overcoming Contemporary Global Crises”

本報告では、新領域「グローバル関係学」の取り組みと理論的枠組みを紹介した。まず現在進行中の「グローバルな危機」が従来の学問的視座では十分に分析できないことを指摘、その理由として連鎖の広がり大きさ、レベルの異なる層の主体間の交錯する関係性の複雑さ、唐突な社会的亀裂の出現、主体のヤヌス性を挙げた。こうした「グローバルな危機」の新奇性を分析するために、グローバル関係学が主体を脱構築し、関係性に焦点を絞って「グローバルな危機」を分析する視座を導入することが重要であることを主張した。

特に本報告が力点をおいたのが、主体間の関係性のみならず主体のなかに埋め込まれた関係性をも分析対象とすべき、との視点である。この「埋め込まれた関係性 embedded relationship」として、「埋め込まれた本質主義的關係性」、「歴史的空間的記憶として埋め込まれた関係性」「他者からのまなざしを内在化させた埋め込まれた関係性」の三種を挙げ、戦後のイラク社会と駐イラク米軍との関係を例に、それぞれの「埋め込まれた関係性」の説明を行った。このような視点を導入することで、宗派やエスニシティといった要素や、歴史や記憶の持つ役割、さらには内在化された対他関係を、関係性の観点から分析することができることを示した。

この報告に対して、討論者として名乗りを上げてくれた Antje Weiner ハンブルク大学教授から、「埋め込まれた関係性、社会的関係性などの関係性に光を当てた視点は、グローバル政治における危機に対して地域的なパースペクティブから取り組もうとするものであり、たいへん貴重なものと感銘を受けた。この議論は、IR におけるストラクチャー・エージェンシー議論に決定的な貢献をなしうるであろうし、ポストリベラルなグローバル秩序におけるグローバルな危機についての議論にも貢献しうる(Your point on shift towards focusing on ‘relationships’ (i.e. ‘embedded relationships’ and ‘social relationships’) in order to approach crises in global politics from a regional perspective strikes me as tremendously valuable. It makes an important and possibly decisive contribution to the structure-agency debate in IR theory as well as to the discussion on global crises in a post-liberal global order.)」との高評価を頂いた。この評価には大きく力づけられ、「グローバル関係学」の方向性が間違っていなかったことを国際的舞台上で証明されたことが、この上なく喜ばしいことであった。